会報JAMT
JAPANESE ASSOCIATION OF MEDICAL TECHNOLOGISTS
発行所
一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会
発行責任者　宮島喜文
編集責任者　深澤憲治
〒143-0016 東京都大田区大森北4丁目10番7号
TEL (03) 3768-4722　FAX (03) 3768-6722
ホームページ https://www.jamt.or.jp

P1 令和４年 新年を迎えて
P2～P3 2021（令和３年）度日臨技精度管理調査総合報告会を終えて
P4 全国「検査と健康展」2021 各地からの報告 第１回

令和４年 新年を迎えて

会員の皆様に対し、謹んで新春のお慶びを申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が世界中で大流行となり、29,000万人を越える感染者が発生し、社会・経済活動にも甚大な影響を及ぼす事態となりました。我が国でも170万人を超える感染者が発生し、欧米などの主要国に比べ、流行の規模は小さいものの９月までの第５波の経験から第６波の発生が懸念されるなど、予断を許さない状況が現在も続いています。

また、11月末には変異株であるオミクロン株が南アフリカで発生し、各国で迅速な入国制限をするなど水際対策が強化されています。

昨年、政府は一日も早い新型コロナウイルスの感染予防対策として、迅速な新型コロナワクチン接種を積極的に展開するため、臨床検査技師に対しても、「違法性の阻却」として、一定の条件下で新型コロナワクチンの接種手として認められました。これにより、厚生労働省が指定する基礎研修を修了し、自治体等が実施する実技研修を修了した会員の皆様は大規模接種会場などで新型コロナワクチン接種の担い手として、活躍していただきました。改めて会員の皆様に深く敬意と感謝を申し上げます。

当会としては、今回の新型コロナウイルス感染症の流行に対して、当初から臨床検査技師として協力できる検体採取やPCR検査又は新型コロナワクチン接種などに関して、現場で臨床検査技師が活躍できるように法制度の整備や財源の確保などを政府や与党に要請してきました。

その結果、PCR検査など病原検査の重要性とそこで働く臨床検査技師の姿もクローズアップされ、私達の社会的な認知度も向上しました。これも都道府県技師会及び会員の皆様のおかげです。

さて、我が国は中長期的な課題である少子高齢化の進行、人口減少など、今回の新型コロナウイルス感染症の拡大が拍車をかける様相となっています。まさに我が国は今までに経験したことのない国難と直面しており、全世代型社会保障制度改革として「人づくり革命」「働き方改革」を着実に推進していかなければなりません。

今年は医療保険制度改革や医療提供体制の見直し、医師の働き方改革を実践するための作業が加速していきます。特に、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、第８次医療計画の策定が注目されます。

臨床検査技師に関するタスク・シフト/シェアでは、昨年10月改正臨検法等の施行により、10行為が認められ、免許取得者が当該行為を実施可能とするために各都道府県技師会において「タスク・シスト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会」が開催されています。また、臨床検査技師学校養成所指定規則の一部が改正され、臨床検査技師養成教育等が大幅に見直され、今年4月の入学者から適用されます。さらに、臨地実習指導者の配置と資格基準が定められ、昨年から日臨技各支部が担当となり臨地実習指導者講習会を開催しています。

一方、精度管理調査事業では、国民に安心安全な質の高い医療を提供するために、「医療法等の一部を改正する法律」（2017年法律第57号）に基づく精度管理を調査の基本とし、従来の「施設認証制度」を「日臨技品質保証施設認証制度」に再構築し、認定分野を最大10分野に拡げ、継続的な是正改善に積極的に取り組む施設に対する認証制度を開始します。

新型コロナウイルス感染症については、未だ、予断を許さない状況ではございますが、このような大事業については、着実に推進する必要があり、これらに対応する次世代の人材育成も急務となっています。

本年も臨床検査技師の職域拡大と地位の向上を目指して厚生労働省を始め関係学会と迅速且つ緊密な連携を図るなど職能団体として、会員からの負託に応えるべく「日臨技を新生させ未来を拓く」をスローガンの下に、昨年同様、役員共々、誠心誠意、各種事業の遂行に努めてまいりますので、会員の皆様の温かいご支援と一層のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

令和４年 元旦
代表理事会長　宮島 喜文
他　役員一同

2021(令和3年)度日臨技精度管理調査総合報告会を終えて

コロナ感染症の新規感染者数は減少傾向に転じているものの、オミクロン型変異株感染者の急拡大に警戒する中、日臨技精度管理調査総合報告会を、幕張メッセ国際会議場２Fコンベンションホール（千葉県千葉市美浜区）で行いました。日本全国より525名の参加（令和２年度は282名、令和元年度は786名、平成30年度は656名）があり、今回も昨年度同様、新型コロナウィルス感染症対策（厚労省通知、千葉県事務連絡および幕張メッセ安全対策基準)を徹底して開催いたしました。具体的には、通常収容人員2,000名のところ最大定員1,000名とし、開催後に追跡調査が可能なように事前登録者のみの参加とし、参加者全員の検温を義務付け、昼食時には会場から全員退去させて換気と消毒作業を行うなどしました。休憩時間中も十分な換気を行い、共用部分のこまめな消毒を心掛けるようにしました。会場内、さらには会場外においても可能な限りソーシャルディスタンスを守るよう参加者には注意喚起しての運営となりました。お陰様で大きなトラブルもなく開催することができました。年内に報告会を開催することができ、調査参加各施設にできるだけ早く外部精度管理調査結果に基づく是正改善を実施していただけるものと確信しています。今年の調査における分野ごとの総括と討議が最後まで活発に行われ、日々の内部精度管理の確認をする意味での外部精度管理調査の意義づけからも非常に有益な報告会であったと感じました。

開会式では、長沢代表理事副会長が、宮島会長に代わり挨拶に立ち、「当会の臨床検査精度管理調査は、1965（昭和40）年に始まり、多くの実績を残してきた。今年度は、4,359施設・4,414件の参加施設数となり過去最高となり、参加数、実施項目数ともに国内最大の精度管理調査事業となっている。2017（平成29）年６月、検体検査の精度管理を盛り込んだ改正医療法、改正臨床検査技師等法が成立し、病院、診療所、助産所における検体検査の精度確保基準の創設、検体検査業務を委託する場合の精度確保基準の見直しなどがなされ、今後、当会も、第三者機関の外部精度管理調査主催団体として、一層の充実が図れるよう推進していく」と述べられました。

また、「日々変化する医療情勢にも柔軟に対応するため、臨床現場即時検査(POCT ： Point Of Care Testing)の精度管理調査、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に対する遺伝子検査の精度管理調査についても、調査試料の目途が立ち、次年度本格導入を予定している。また、次世代シーケンサーによる遺伝子パネル検査の外部精度管理についても、ワーキング委員の方で取り組んでいる。

一方、2010（平成22）年度より開始した精度保証施設認証制度を、改正医療法等に相応する形で改正を進め、2022（令和４）年６月には新しい制度の下、日臨技精度管理調査および品質を認証する制度をスタートする。

当会では、公益目的事業として臨床検査の精度管理調査を実施しているだけでなく、同時に臨床検査データ標準化事業も進めてきた。今後も、この標準化事業と、毎年実施する精度管理調査、ならびに都道府県技師会で実施する精度管理調査事業およびサポート事業、これらの事業を相互に補完し、国民の診断並びに疾病予防のために、精確な臨床検査値を安全・安心に提供する体制を整えていく」とも述べられました。

※

その後、 各部門より解析結果について報告を行いました。部門報告は５部構成とし、特に、生理部門では、心電図、超音波、神経生理、および呼吸機能分野に分けて十分な時間をとりました。１分野当たりの持ち時間に制限があり、特に問題のあった事項について的を絞った解説とし、また、セクションごと総合討論の時間を設け、会場より質問・意見を求めました。以下に各部門の報告概要を紹介します。

【第１部：生理部門】

心電図分野では、評価問題として基本的な右胸心、電解質異常、ブルガダ型心電図、虚血性変化としては心電図の虚血所見と責任冠動脈の推測、および不整脈では顕性WPW症候群に合併した心房細動と2:1伝導の心房粗動について出題した。設問６の正解率が低かったため評価対象外とした。同設問は急性心筋梗塞症例で臨床情報と心電図変化から考えられる所見を導き出すものだった。aVR誘導にST上昇、血圧低下と心筋バイオマーカーの上昇を示す場合には、まずは左冠動脈主幹部領域の急性冠症候群を考えるべきであるという趣旨の問題だったが、左冠動脈前下行枝を選択する施設が多かった。今後は、典型的な症例を用いて施設間差を注視していきたい。（立田顕久）

超音波分野では、全体的に正解率が非常に良好であり、参加施設は、基本的レベルに達していると評価した。（神野雅史、堀内正志）

呼吸機能分野においては、内部精度管理の知識を問う設問について、正解率 70.8%と低率にとどまり問題を残した。ここ数年、同様の内容の設問を連続して出題しているが改善傾向を認めない。JAMT教本シリーズ等を熟読してほしい。（山本雅史、田邊晃子）

神経生理・PSG・聴力検査分野では、日常遭遇する確率が高い症例や典型的な波形や画像について作成し

た。脳波検査における生体モニター観察について注意喚起をした。（坂下文康）

【第２部：POCTトライアル調査報告】

POCT(Point of Care Testing: 臨床現場即時検査)精度管理調査中規模トライアル・実態調査報告を、300施設と関連企業で実施した。調査で対象としたのは、インフルエンザA型・B型、アデノウイルス、RSウイルス、肺炎マイコプラズマ、A群溶血性レンサ球菌、および新型コロナウイルスの各抗原定性キットであった。コロナウイルス以外のキットに対する反応性を確認することができた。コロナウイルスに関しては、今後、試料の調整を図るとした。（中村竜也）

【第３部：一般部門・微生物部門・輸血部門】

一般検査部門は、例年通り尿定性、便中ヒトヘモグロビンおよびフォトサーベイを実施した。尿定性検査では、測定機種間差を認めた。定性値「2+」以上の値について、各社の設定が異なることが主原因とした。今後、メーカと試料について検討を行っていく予定であるとした。フォトサーベイでは、コイロサイトの形態的特徴についての理解にバラツキがあり、理解を深めるよう訴えた。また、異型細胞の判別では、尿路上皮細胞と、腺癌細胞疑いで意見が割れた。（米山正芳）

微生物部門は、塗抹（推定菌種）項目について、初の試みとして酵母様真菌の判定を出題した。同定検査は両試料共に良好な結果であった。薬剤感受性では、薬剤耐性の検出について機種間差があり、評価対象外となる薬剤が存在した。機種間における薬剤耐性菌の精度管理のあり方に関して今後の課題とした。ディスク拡散法では、阻止円径のバラつきが大きかった。外れた阻止円直径は、CLSI（Clinical Laboratory Standards Institute）が定めている精度管理限界値の範囲から大小いずれも存在していた。今回の調査では、全体の1.3～3.5%の施設がCLSI標準ディスク法による回答であったが、微量液体希釈法への切り替えが望まれる。フォトサーベイの結果は、概ね良好な正解率であったが、腸内細菌目細菌の同定、微量液体希釈法のMIC判定およびβラクタマーゼの判定について、正解率がやや低く、基本的な手技の再確認が必要であると思われた。（中村竜也）

輸血部門は、入力ミス・検体誤認などの初歩的なエラーが、重大なアクシデントに繋がるため、検体を扱う際の結果登録・報告などの業務は、評価の如何を問わず自施設の対応を今一度確認すべきであることを強く訴えた。輸血検査のスタンダードである「赤血球型検査（赤血球系検査）ガイドライン（日本輸血・細胞治療学会）」を準拠し輸血検査を実施してほしいとした訴えた。次年度以降、適切な検査体制をとっていない施設については、より厳格に評価するとした。輸血部門は、特に主観が入りやすい検査であり、誰が検査をしても同じ結果を導き出せるよう、定期的に検査従事者間で目合わせを行い、記録を残しておくことを求めた。（三浦邦彦）

【第４部：臨床化学部門・免疫血清部門・血液部門】

臨床化学は、昨年話題となったALPおよびLDのJSCC標準化対応法からIFCC標準化対応法への移行は、９割以上の施設で移行済みであったことを明らかにした。１年間という短い期間での移行となり、若干の影響はあったが、比較的スムーズな移行となったとした。（汐谷陽子）

免疫血清部門では、血漿蛋白項目は、免疫グロブリン、β2-mG は例年どおり収束し問題なかった。RFも試薬内CVは収束していたが、試薬間平均CVは依然大きかった。甲状腺ホルモンは、試薬間CVが、TSH、FT4共に差を認めた。腫瘍マーカー(CEA・AFP・フェリチン・PSA)は、例年どおりの傾向を示した。同一メーカーであっても試薬や機器の種類が多岐にわたる傾向にあり、改めて自施設は採用する試薬・機器の名称を確認の上、精度管理参加時の入力を行っていただきたい。感染症項目については、定性判定の評価は、HBs抗原・HCV抗体・梅毒TP抗体すべての項目で良好であったが、本サーベイにおける試薬特性ならびにデータの分布を是非参考にしていただき、自施設のデータ管理に役立てていただきたいとした。（久保光史）

血液部門では、血算では血小板、MCVでCV値が機種間でばらつく結果を認めたが、全体的には収束したデーターが得られた。しかし、凝固では試薬間差を認め、メーカーに対して、試薬や標準血漿、管理血漿の整理とともに、ISI値や標準物質の表示値のメーカー間差の是正を引き続き強く要望した。フォトサーベイでは、末梢血・骨髄像ともに正解率が高く大きな問題はなかった。（池田千秋）

【第５部：病理部門・細胞部門・遺伝子部門】

病理部門は例年通りフォトサーベイを実施した。全体の平均正解率は98%と良好であり、幅広く十分な内部精度管理がなされていることがうかがい知れた。設問は、病理検査に携わる臨床検査技師として当然理解しておかなくてはならない知識と技術について、受検施設の機能に即して回答できるよう配慮している。今後は、通常のフォトサーベイとバーチャルスライドを用いた手法を駆使して、さらに幅広い調査ができるようにしていくとした。（石田克成）

細胞部門はパパニコロウ染色と、免疫細胞化学染色を施した染色画像を用いた設問を作成した。15問中、10問が正解率99%以上であった。回答に若干のばらつきが見られた設問について詳細な解説がなされた。細胞検査は検査する者の主観に大きく左右されるため、本サーベイを施設の問題点の把握、改善の手掛かりとして有効利用していただき、それぞれの検査精度の維持・向上に取り組んでいただきたいと述べた。（遠藤浩之）

遺伝子部門では、例年通りHCV定量、HBV定量および結核菌群定性の３項目を実施した。昨年度は全国的にコロナウイルス感染拡大に伴い、施設内で遺伝子検査を新規に導入する施設が増えたことから、本年度の参加数が飛躍的に伸びた。検査において陰性および陽性対照を同時に測定していない施設が多く見受けられた。試薬の管理、測定時の手順の確認、コントロールの測定等を再確認し、精度の維持に努めてほしいと訴えた。（三澤慶樹）

全国「検査と健康展」2021 各地からの報告 第1回

臨床検査のことと、それを担う私たち臨床検査技師のことを国民の皆様に広く知っていただくために、日本臨床衛生検査技師会は、毎年11月に全国「検査と健康展」を全国で開催しています。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により多くの都道府県で中止を余儀なくされましたが、本年度はWebの活用や予約制を導入するなど感染防止を徹底し、試行錯誤しながら、中央会場の宮崎県をはじめとした多くの会場で実施することができました。各都道府県技師会からの報告を本号より順次ご紹介していきます。

石川県

令和３年度の石川県臨床衛生検査技師会での「検査と健康展」は、新型コロナウイルス感染症の感染対策をふまえて、これまでの対面型の健康チェックや検査相談中心での企画ではなく市民公開講座とし、10月23日（土）に行いました。

当初は、参加型で準備を進めていましたが、新型コロナウイルス感染症の５波の勢いが増す状況から、Web開催へ切り替えました。配信場所は、参加型開催で行う予定の場所の石川県立音楽堂邦楽ホールをそのまま用いました。広報活動は、作成したポスターやチラシを石臨技会員や賛助会員に配布し宣伝活動を依頼し、さらに、チラシの新聞折り込みですすめました。

市民公開講座のテーマは、″新型コロナウイルス感染症　これまでとこれから″と題し、２つの講演を行いました。１つ目は検査の現場からとし、『新型コロナウイルス感染症のこれまで　～発生状況と検査状況～』を石川県保健環境センターの倉本早苗臨床検査技師に、２つ目は医療の現場からとし、『新型コロナウイルス感染症の傾向と対策　2021秋編　～あれから変わったこと、変わってないこと～』を小松市民病院呼吸器内科の米田太郎医師の講演を行いました。双方とも石川県の新型コロナウイルス感染症対応に先陣を切って活躍されている方で、発生状況や特徴や、症例を通しての説明等、興味深い内容を丁寧に講演され、評判も良好でした。Zoomウェビナーには106件の入室がありました。

また、主催者から宮島会長自らZoomで参加で、臨床検査技師への啓発も含めた挨拶をいただきました。

（石川県臨床衛生検査技師会　児玉 美紀）

山梨県

11月３日（水）イオンモール甲府昭和店３階イオンホールにて「検査と健康展」を開催した。コロナ感染第５波の最中、紆余曲折するも会場と時間を分け、高校生向け企画と一般来場者向け企画を施行しました。「高校生臨床検査技師体験」では保護者の参加も募集し、「みんなの臨床検査、検査で守るあなたの健康」を鑑賞し予備知識をつけていただいた後、さらに保護者向け講習と高校生体験と会場を分けることで密を回避しました。保護者向け講習では臨床検査技師の資格を取得するために必要な情報、就職先などの講話の後にQ&Aを設けることで職業選択の一助としての理解を深めていただきました。高校生体験では参加研究班の数も増え、歓声が上がるほど楽しく実習が行われたり、技師の説明に真摯に肯いている姿が見受けられました。アンケート調査にて保護者からの「将来の就職選択に役立った」などのコメントが得られ、高校生からは「高校生のうちにどんな勉強をしたらよいか」「他にはどんな検査を行っているのか詳しく知りたい」「どんな大学があるのか知りたい」「チーム医療での役割を知りたい」など活発なコメントが得られました。

一般来場者企画では、受付時に入場を振り分け、検温後に血管機能検査を行い、検査後に不安がある方は、「健康相談」に案内し医師と面談していただきました。検査会場は開かれた場所に設営し、健康相談室は衝立使用の対応と空気清浄機による感染予防を行いました。

（山梨県臨床検査技師会　山口 理香）

（編集後記）謹賀新年　『今年はこれをやろう！』と目標を決めますが、意思の弱さから春を迎える頃にすっかりと忘れるということを何年も繰り返しております。今年こそは…。昨年は新型コロナウイルス感染が８月以降は落ち着き、ようやく対面での研修会等が行われ、顔を合わせることの大切さを再認識いたしました。オミクロン株の感染状況が気にかかるところですが、５月の日本医学検査学会では会員の皆さんと近況を話しながら集まれることを期待しています。（桑原）